

知覧高女なでしこ会座談会の報告

坂元恒太・桑代照明

一・経緯

知覧特攻平和会館は、紀要第三号において昭和二十（一九四五）年四月十二日に、知覧飛行場で撮影された一枚の写真について、当時の日記、報道された新聞記事、撮影現場にいた方々の証言をもとにした論考を掲載した^{（注1）}。その後の後日談として、その写真が撮影された日に特攻隊の出撃を見送った知覧高女なでしこ会（以下、なでしこ会）のメンバーの座談会を行ったので、ここに報告するものである。

なでしこ会とは、昭和二十（一九四五）年三月二十七日から四月十八日までの二十三日間に知覧基地の三角兵舎で掃除や洗濯など特攻隊員の身の周りの世話をした知覧高等女学校三年生だった女性らのことである。会の名称は、知覧高等女学校の校章にちなんだもの^{（注2）}であるが、彼女ら自身が卒業後に同窓会をそう名付けたもので、当時はそのような呼称は用いられていなかった。戦後、沖縄戦における「ひめゆり学徒隊」の存在が知られるようになると、「なでしこ隊」と呼称される例も出てきたが、当時は特別に知覧高女をそう呼んでいた記録はない。

さて、今回の座談会の発端は、上記論考を編集する過程において、当館語り部の一人である桑代照明が、なでしこ会のメンバーでもある自身の母親らの言葉を公式に記録しておくことを提案したことによる。桑代は、母親ら、当時のことを知る方々は年を追うごとに少なくなっていく中、これまで積極的に語ってこなかったような人々の声を記録に残すことのできる時間は限られていることを訴えた。

以上の経緯により、令和三年二月半ばから座談会を計画するに至った。特に、写真が撮影された日の様子や、日常の三角兵舎内で特攻隊員と接した際のエピソードや、出撃前の特攻隊員の様子、三角兵舎への花の持ち寄り、特攻隊の見送りの状況、飛行戦隊の方々のエピソード等を聞いておきたいというねらいがあった。実施日は、写真が撮影された日である四月十二日を設定し、座談会と併せて、知覧特攻平和観音堂への参拝や三角兵舎復元建物及び館内見学などを含め、なでしこ会の皆様が当時を偲ぶことのできるような内容で企画することにした。

二・なでしこ会に関するこれまでの記録等

知覧高女が存在が世に知られるようになった過程では、女学生の日記と写真の存在が大きな役割を果たしたと考えられる。

女学生の日記が出版物の中で初めて引用されたのは、戦争当時に陸軍報道班員として知覧基地にいた高木俊朗が著した『知覧』（後に『特攻基地 知覧』に改題）^{（注3）}である。昭和三十九年十一月から昭和四十年七月まで『週間朝日』に連載し、加筆の上で出版された。同書には、特攻隊員や特攻隊員と関わった知覧の住民のエピソードが豊富に記録されている。同書は、前田笙子^{（注4）}が書いていた当時の日記に記された生き残りの特攻隊員を訪ねるところから展開しており、知覧高女の面々も実名で登場する。同様に、当時の知覧に滞在していた人物が戦後に知覧を訪ね取材したノンフィクション小説には、『今日われ生きて有り』^{（注5）}がある。著書は、陸軍航空通信隊員であり知覧基地にも滞在していたことのある神坂次郎である。同書でも、前田笙子の日記が引用されており、知覧高女が存在が映し出されている。

桜の枝を持ち特攻隊を見送る写真は、当館紀要第三号掲載論考にて明らかにしたように^{（注6）}、昭和二十年当時に毎日新聞で報道された写真が、

戦後の書籍に掲載されて以降、度々用いられることで認知度が高まっていったと考えられる。桜の枝を手に持ち、特攻隊員を見送ったその写真の存在がなければ、特攻隊員を見送った知覧高女というイメージはまた違った形で定着していたであろう。

一方、知覧高女らも、特攻隊員の遺書・手紙や女学生の日記などの手記をまとめた書籍、『知覧特攻基地』（後に『群青 知覧特攻基地より』に改題）^{（注6）}を昭和五十四年に発行している。本書のまえがきに、前田笙子は次のように記している。

「昭和二〇年三月二七日、知覧高等女学校の三年生進級を前にして、突然、私たちは勤労動員学生として、各地から知覧基地へ集結された特攻隊員の身のお世話をするようになりました。敗戦濃い戦局だったために、軍だけでは隊員たちを受け入れるゆとりもなく、その態勢も整っていなかったのでしょうか。激しい空襲のさなかを自宅から基地まで、遠い人は二時間もかかって通い、三角兵舎の掃除、食事の用意、洗濯、そしてつくりものなどの雑用係として、一四、五歳の少女だった私たちがあたることになったのです。最初一八名だった女学生も、手が足りなくなつて次第に増員されるようになりました。

多くの隊員は到着して四、五日間を基地の三角兵舎ですごして出撃されましたが、なかには、たった一夜だけの滞在で慌しく出撃された方もおられました。

それは、つかの間の出会いでしたが、長い年月を経た今でも、心の奥底に多くの隊員たちの思い出が生きつづけているのは、平和な時代には想像もできないような異常な戦争体験だったからでしょう。泣きながら桜の小枝を打ち振って出撃を見送ったときの光景が、折にふれ鮮烈な思い出としてよみがえってまいります。」

この文章は、元知覧町役場職員であった村永薫が編集した『知覧特別

攻撃隊」^{（注7）}の中でも引用されている。なお、同書では、なでしこ会の『知覧特攻基地』と『知覧町郷土誌』の二つを参考図書にあげているように、なでしこ会の出版物と同様のスタイルで、特攻隊員の遺稿や女学生の日記などを活字化したもので構成されている。

前田笙子の日記は、現在は知覧特攻平和会館収蔵資料となっており、平成二十七（二〇一五）年には南九州市指定文化財に指定された。日記に記載されている内容や、証言記録は、当館紀要第一号に掲載されている^{（注8）}ほか、インタビュー映像を当館戦史資料室で上映している。

また、東京新宿にある居酒屋「薩摩おごじよ」も、なでしこ会を語る上では欠かせない存在である。居酒屋の店主であった赤羽礼子は、知覧における陸軍指定食堂であった富屋食堂の鳥濱とめの娘で、なでしこ会の一員でもあった。彼女の口述記録については、佐藤早苗著『特攻の町・知覧』や赤羽礼子・石井宏著『ホテル帰る』などがある^{（注9）}。

もっとも、知覧における戦争の記憶を伝えてきたのは、なでしこ会だけではない。知覧町立図書館（現南九州市立図書館）では、戦後五十年を迎えるにあたって、元隊員や地域住民から集めた手記を機関誌『知覧文化』に掲載しており、その成果は戦後五十年記念誌刊行会発行の『特攻のまち・知覧』として出版された^{（注10）}。同書には、なでしこ会のメンバーでもある、塗木とし子の「当時をふりかえり」と、永崎（旧姓前田）笙子「紹刺し・衣料切符」の手記が掲載されている。

以上のように、なでしこ会の活動の記録やメディア等への露出は、かつては永崎笙子や赤羽礼子の二人を中心になされてきた。両名が存命のうち、他の同級生の方々が当時のことを語る機会は少なかったようである。しかしながら、両名とも鬼籍に入られ、他の方々も年を追うごとに少なくなっていく今、可能なうちに個々の記憶を記録化することが迫られている。記録化する試みは、今回が初めてではなく、平成三十（二〇一八）年十二月二十一日にも座談会を行っている^{（注11）}。

なお、福岡県内在住で、知覧高女三年生だった当時のことを、児童・生徒の平和学習の場で伝える活動を行っている女性がいる。今回は、知覧在住者に限ったために打診するには至らなかった。

三．企画内容

【目的】

知覧高女なでしこ会の方々の記憶を、当事者の言葉として記録化し後世に残していくことを目的とし、それぞれの思い出を語っていただく場を提供する。

【実施方法】

(1) 開催期日 令和三年四月十二日(月)

(2) 開催場所 知覧特攻平和会館

(3) 対象者 知覧高女なでしこ会のうち、知覧在住の健在な方々
 朽川ムツ子さん、前田要子さん、鶴留ツルさん、
 桑代チノさん

(4) スケジュール案

八時三十分 送迎

九時 到着。特攻観音参拝、三角兵舎見学

九時三十分 知覧特攻平和会館入館

十時 語り部の講話(講話室)

十時三十分 休憩

十一時 座談会 (講話室)

【安全対策】

高齢者の体調に配慮した対応として、事前に降車場所から観音堂、三角兵舎復元建物、平和会館内に至る行程を歩き安全に配慮すべき点を抽出し、介添え役を定め、保健師の立会いによる体調変化に対応する体制

も敷いた。コロナ禍であることから、検温、手指消毒、マスク・フェイスマスクの着用、アクリル板の設置、室内換気、ソーシャルディスタンス等の感染防止の対策を施した。

【準備】

以上の企画内容をもとに本人らと交渉を図り、令和三年三月三日付けで招待状を届け承諾を得た。限られた時間内でお話をしていただくために、①知覧高女なでしこ会に関する話題、②特攻見送りの写真に関する話題、③飛行場での体験に関する話題と三つのテーマを設定し、文字表示したパネルを手元で示しながら進行することにした。

また、当時の記憶を呼び起こしていただくために、特攻見送りの写真や、三角兵舎内での給仕の様子が撮影された写真、知覧高等女学校生徒の集合写真を会場に掲示し、さらに、南九州市教育委員会が行った三角兵舎跡発掘調査で出土したガラス瓶や茶碗等を陳列し、なでしこの花を生けた小瓶をそれぞれの卓上に飾った。

【マスコット人形】

令和三年四月に入り、開催日まで残り十日ほど前になった時期だった。なでしこ会の方々と連絡を取り合う中で、マスコット人形の話題になった際に、「今でもまだ作れるよ」という声上がり、当日までにそれぞれが人形を作ってきてくださることになった。

四．座談会の内容

・日 時…令和三年四月十二日(月) 十一時～十二時

・進行役…知覧特攻平和会館学芸員 坂元恒太

・聞き手…知覧特攻平和会館学芸員 羽場恵理子

・語り手…知覧高女なでしこ会(朽川ムツ子さん、前田要子さん、鶴留ツルさん、桑代チノさん)

以下に、座談会の内容を文字起こししたものを報告する。

聞き手（坂元）「これより知覧高等女学校の卒業生であられます、知覧高女なでしこ会の戸川ムツ子様、前田要子様、鶴留ツル様、桑代チノ様をお迎えしての座談会を開催致します。私、知覧特攻平和会館学芸員の坂元恒太と申します。本日 of 進行役を務めさせていただきます。よろしくお願い致します。では皆様方への御質問をさせていただく羽場です。」

聞き手（羽場）「羽場恵理子です。よろしくお願いします。」

聞き手（坂元）「座談会の話の進め方について説明を致します。今回私の方で三つのテーマを設定させていただきました。一つ目は、なでしこ会について。二つ目は特攻隊員見送りの写真について、三つ目が知覧飛行場での体験についてということで進めていきたいと思ひます。それでは一つ目のテーマ「知覧高女なでしこ会」について羽場さんお願いします。」

聞き手（羽場）「まず、なでしこ会という名前の由来について教えていただきますたいです。」

聞き手（坂元）「なでしこ会という名称ですが、名前の由来は何でしょうか。」

語り手（桑代）「校旗の中に、なでしこの花の形があつて、バッジもなでしこの形でした。⁽⁷⁾そして終戦後になつてから、私たちは御見送りの写真を知りました。」

聞き手（坂元）「その当時はなでしこ会とは呼んでいなくて、戦後になつてからということですね。」

語り手（桑代）「奉仕に行っている間は、なでしこ部隊という名前は全然知らなかつたです。⁽⁴⁾」

語り手（前田）「そういうのはなかつたです。」

聞き手（坂元）「戦後に慰霊というか、特攻隊の方々を偲ぶために集つて、その時になでしこ会と言うことで集まつたわけですね。ここに会員名簿をお借りしてきています。ここに皆さんのお名前があるのですけど、このようにして同窓会をなでしこ会という風に呼んで続けてこられたわけですかね。」

聞き手（羽場）「次の質問です。そのなでしこ会は、戦後に結成されたとお聞きしましたが、どのようにして結成されたのでしょうか？同窓会で作ろうとなつたのでしょうか。」

聞き手（坂元）「何かきっかけがありましたか。」

語り手（桑代）「写真が出て、こんな写真があつたんだなど。終戦後しばらく経つてから、あの写真を見ました。⁽⁷⁾」

聞き手（坂元）「写真というのは、見送りの写真でしょうか。」

語り手（桑代）「はい、そうです。」

聞き手（羽場）「では次の質問です。なでしこ会はどのような活動をするのか教えてください。」

聞き手（坂元）「皆さんで集まつて何かするとか。」

語り手（前田）「そんなのはありませんでしたよ。」

聞き手（羽場）「同窓会みたいに集まるような。」

語り手（前田）「同窓会とまではいきませんが、ちょっと集まつて会をするものでした。⁽⁵⁾」

聞き手（坂元）「集まる日は決まつた日がありましたか。」

語り手（前田）「いいえ、ありません。」

聞き手（坂元）「知覧から県外に行つてゐる方もいらしたのですよね。それとも地元の方だけですか。」

語り手（前田）「ほとんど地元の人達でした。」

語り手（桑代）「知覧の女学校の一〇四人かな、そのクラスしか、なでしこ会ではないです。その年は六年生からと、高等科からと合併になった年だったから、それで二クラスでした。」

語り手（前田）「高等科というのがありますか。」

語り手（鶴留）「高等科は一年、二年までだったものね。それで高等二年が終わった人は、青年学校の方に行った様な気がする。私たちは女学校だったから、その高等科が終わってからのは全然わかりません。」

語り手（前田）「戦争中だったから、学校なんて。」

聞き手（坂元）「とすると、皆様方は同級生ではあるのですけれども、ちょうど制度が変わって実際の年齢からすると、一つ上、二つ上の人達までが同級生ということになっているのですよね。」

語り手（前田）「そうです。高等科一年、二年の人達もいましたからね。」

聞き手（坂元）「皆様の実際の年齢は、同じ歳の方もいたり、年下の方もいらつしやるわけですよね。」

語り手（杵川）「私は高等一年から。」

語り手（前田）「私は六年生からだった。私は他所から帰ってきたからちょっとだったけど。」

聞き手（坂元）「その当時昭和二十年でいうと、何歳ですか。」

語り手（桑代）「十五歳。六年生から入った人は十四歳。」

聞き手（坂元）「鶴留さんはその時はおいくつですか。」

語り手（鶴留）「私は六年生から。」

聞き手（坂元）「ありがとうございます。では、なでしこ会については以上で話を終えます。こちらに写真があります。この写真で記憶にある方はいますか。誰が映ってるのかわかり

ますか。」

語り手（桑代）「わかる人はいます。」

語り手（杵川）「この人が、佐多ひみちゃんです。中福良の人だと思いますけど。」

聞き手（坂元）「この方が佐多ひみさん。七十六年も前のことですからね。この時間はあと二十分位ですけど、皆さん、この頃に戻った気持ちで思い出してもらいたいと思います。続きまして、二つ目のテーマの「特攻隊員見送りの写真について」です。非常に有名になった写真ですが、この写真が撮影された日のことを思い出していただきたいと思います。」

聞き手（羽場）「見送りの写真ですが、誰が写真に写っているか覚えていますか。」

語り手（前田）「知覧校区の人ばかりですね。^(オ)」

聞き手（羽場）「一部の人達なのですね。では、見送りしている人と、三角兵舎や別な所で作業していた人ということですね。」

語り手（前田）「私達は兵舎にいたから、こういうのはしてないから。ずつと兵舎にいたから。^(カ)」

聞き手（羽場）「では、こちらで見送りをしたというのは桑代さんですか。」

語り手（桑代）「どっちにいろかはわからない。ここと決まっていはいから。間に合うといいなと思いつながら、坂を下駄履きで一生懸命駆け上がったくて、左に誰がいるのか、右に誰がいるのか全然わからなかった。そういう状態。^(キ)」

聞き手（坂元）「下駄履きで駆け上がったというの、どこから駆け上がったのですか。」

語り手（桑代）「三角兵舎から戦隊指揮所まで、坂を一生懸命、間に合うと良いがと思って。掃除をしていたのを片付けて、間に合うと良いがと一生懸命坂を上って。そしてもう並ぶ所が決まっていたから、左に誰がいるか。あの間隔で近かったり、こっちにいるか全然分らない。ここに写って入る人達は、はつきり分かっているけれど。要子さん、どのくらいいたかな？」

語り手（前田）「全員。」

語り手（桑代）「あんまり余計に並んでいないから、間に合ったかどうか。」

語り手（前田）「この写真のこと？私は全然わからない、兵舎にいたから。」

語り手（桑代）「間に合う人もいるし、間に合わない人も。兵舎に「何時に特攻を見送り」と言って、伝令みたいな人が言いに来るから、隅にバケツや雑巾なんか置いて、すぐ走って行っていました。」

聞き手（羽場）「では、その見送りに駆けて行ったとのことでしたが、見送りをするということは前に誰かが見送りをしようと言ってからですか。」

語り手（桑代）「いや、それは兵舎に言ってくるから。「何時に特攻隊を見送り」といって伝令が来るから、その時点ですぐ片付けて走って行っていました。」

聞き手（羽場）「見送りをしようという話があったということなんです。この見送りの写真が四月十二日とのことですが、見送りをした日は他にもあったのでしょうか。」

語り手（前田）「飛行機が飛び立つのが？」

聞き手（羽場）「そうですね、十二日以外の他の出撃の日も見送りがあったのですね。」

語り手（前田）「ちょこちょこありましたから。」

語り手（桑代）「いっぱいあるよ。余計出ないうちから見送ったのだから。その日は次から次へに上った時は、今日は相当出るねと。十二日は次から次へと出たのですから。そしてその後（戦後）から人に聞いたら、あの日は第二総攻撃の日で八十機から出たと。それはもう飛行機が轟々と何十機と上っていました。何機編隊だったか分からないけど、編隊を組んで。」

聞き手（羽場）「見送りが他の日にもあって、十二日は特に飛行機が多かったということですね。」

語り手（桑代）「そうです。」

語り手（栢川）「見送りに行けない時は、学校の近くの防空壕堀りを私たちはしていたよね。BSがどんどん来る頃は。」

聞き手（羽場）「もう一つ、この写真で聞きたいことがあるのですが、見送りの時に桜の花、枝を持って見送りをしていますが、この桜について何処で、持ってきたなど。」

語り手（前田）「それはね、知覧の町の役場の橋のもとに大きな桜の木があって、そこから取っていくものでした。」

語り手（栢川）「早い桜がありましたから。」

聞き手（羽場）「そこで皆一緒に枝を取ったり、他の所から取ったり。」

語り手（前田）「そんなこともあったかもしれませんがね。」

語り手（栢川）「富屋旅館から近いから、あそこだったと思いますね。」

語り手（前田）「私達は遠かったから取らなかったけど。」

聞き手（羽場）「その桜の枝を持って行こうと言うのは、前から誰かが言ったりしたのですか。」

語り手（前田）「いいえ、個人個人で自分達が取って見送りに行っていました。」

聞き手（羽場）「では皆、気持ち桜を持って見送りに行こうと、それ

ぞれ思っていたと。」

語り手（前田）「そして飛行機にその桜を載せて行かれました。」^(三)

聞き手（坂元）「見送りの時には毎回桜の枝を持って行っていたのですか。」

語り手（前田）「毎回は出来ませんでしたから、そこはちょっと覚えていませんけど。」

聞き手（羽場）「ありがとうございます。」

聞き手（坂元）「ちょうどこの写真が撮影された時のことが、永崎笙子さんの日記に「パチリ」と書かれていて、後ろから映画のおじさんが写しているとあって、まさしくその時に撮影されたものがこれだったわけですけども、その時にこのように写真が撮影されていると皆さんご存知でしたか。」

語り手（前田）「全然知りませんでした。」

語り手（桑代）「終戦後、相当してから目にしたから。こんな写真を、あの時代にカメラマンが撮ったということなんて全然知りませんでした。」

聞き手（坂元）「ここにパネルにしたものがありますが、あの写真が毎日新聞で報道されているのです。昭和二十年四月十七日の新聞です。写真の説明が見送りの話というよりは、花と特攻という見出しが付けられた記事です。内容は女学生の方々が色とりどりの色んな花を三角兵舎に持ち寄って飾っているというようにことが書かれています。このように報道されたということは、もちろんご存知なかったわけですね。戦後この写真を御覧になって、自分達が写っていたんだと知った時はどのような感じがしましたか。誰が写っているとか話になりましたか。」

語り手（前田）「それはしました。」

聞き手（坂元）「この中に写っている方、どなたかいますか。」

語り手（桑代）「前田笙子さんが埼玉から帰って来てくれて、ここに保管してあるはずですよ。モンペの色合いとか柄で大概わかったと。」

聞き手（羽場）「たしかに皆さん、色とりどりのモンペを着ているので、そういうのでお話したのですね。」

語り手（前田）「昔は紺という着物があって、その布で作って。」

聞き手（坂元）「鶴留さん、さっき展示室でお話されていたのがこの写真ですが。」

語り手（鶴留）「私は写っていると思うけど、目が見えないからわからない。」

語り手（桑代）「似たような人が二人いるから、頭の形から。」

聞き手（坂元）「この写真の右側のお二人、どちらかですか。」

語り手（鶴留）「後姿を見ると自分だと思っていたから。後姿は、はっきり自分だと思います。」^(サ)

聞き手（羽場）「こちらの飛行機に乗っているのは誰だったのか覚えていますか。」

語り手（前田）「私と笙子さんが二人居りましたから。」

聞き手（羽場）「こちら飛行機が写っていますが、飛行機と見送りの立ち位置が結構近いと。」

語り手（前田）「近かったです。」

聞き手（羽場）「エンジンの音も、すごくよく聞えるくらいなの。何メートルくらいだったかは覚えていませんか。」

語り手（前田）「これの二倍くらいだったかな。」

聞き手（羽場）「スクリーンから前田さんの所の約二倍くらい。」

語り手（前田）「二倍くらいの所ですね。だから良く見えたわけです。」



写真1 到着後に観音堂へ向かうなでしこ会



写真2 知覧特攻観音堂での参拝



写真3 三角兵舎復元建物内での回想



写真4 玄関前での会館職員らの出迎え



写真5 座談会風景



写真6 三角兵舎跡出土遺物と、今回の座談会に出席するにあたりなでしこ会の方々作成したマスコット人形



写真7 三角兵舎跡慰霊碑における献花



写真8 三角兵舎跡でのテレビ局による取材



写真9 座談会へ参加した知覧高女なでしこ会
(左から前田要子さん、桑代チノさん、鶴留ツルさん、栢川ムツ子さん)

聞き手（羽場）「たしかに、それくらいだったら、もしかしたらパイロットの顔も。」

語り手（前田）「はい、パイロットの顔もちゃんと。」

聞き手（羽場）「やはりこの距離というのと、お世話したというので、あのパイロットはあの人だというのも。」

語り手（前田）「そうそう、それもちやんと分かってました。」

聞き手（坂元）「続きまして、三つ目のテーマに移りたいと思います。知覧飛行場での体験ということで、色んな体験を皆さんなさっていると思います。知覧飛行場で、どのようなことがあったのか、色んな出来事をお聞かせいただければ有難いです。」

聞き手（羽場）「先程もお聞きしたように、お世話した隊員のこと覚えていてという風にお聞きしました。その中で、特攻隊員の方達と何か関わりがあったり、お話しをしたことについて覚えているでしょうか。」

語り手（前田）「年数が経ってますからね。この人達ではなくて、生き残って四国に居られて、四〇五年前ですかね、会いに行きましたよ。」

聞き手（羽場）「戦時中だけではなく、戦後、戦争が終わった後も関わりがあったと。」

語り手（前田）「はい。ありまして、会いに行きました。」

聞き手（羽場）「特攻隊員の担当だったのが、前田さんと鶴留さんは特攻隊員の三角兵舎での担当だったのですか。」

語り手（鶴留）「担当というか、特攻隊員の三角兵舎にいたことは確かですけど、別に話したことはないでした。」

聞き手（羽場）「では、話したことはないけれど、特攻隊員の様子で印象に残っていることなどはありますか。」

語り手（鶴留）「別に、特攻隊員だけで話している様子はなかったような気がします。別に私達は特攻隊員とはあまり話さなかったから。全然話をしていないから。」

聞き手（坂元）「特攻隊員の方とお話しをしたり、或いは特攻隊員の方から手紙を預かったりとか、何か書いてもらったりとか、そういったのをされたことはなかったですか。」

語り手（前田）「ありました。あります。私、まだ持っています。」

聞き手（坂元）「あー、そうなんですか。書いてもらったものがまだ、お手元にあるわけですね。」

聞き手（羽場）「それはやはり、出撃する前に。」

語り手（前田）「前に、書いてもらいました。」

聞き手（羽場）「それは書いてもらったのは、前田さんから「書いて欲しい。」と言ったのか、それとも特攻隊員の人に渡されたものですか。」

語り手（前田）「多分、書いてもらいたくて書いたんでしょうね。」

聞き手（坂元）「どんなことを書いていただいたのでしょうか。」

語り手（前田）「ちょっと。持ってくれば良かったですね。もう忘れて。」

聞き手（坂元）「またいつか教えてください。」

語り手（前田）「機会がある時には持ってきて来ます。」

聞き手（坂元）「「柙川さん、どうですか。特攻隊員の方から何か書いてもらったことがありますか。」」

語り手（柙川）「「大学ノートに書いてもらったです。特攻隊の歌を書いてももらったりした。そのノートがどこにやったのか。」」

聞き手（坂元）「「その特攻隊員の方のお名前は覚えていますか。」」

語り手（柙川）「「長谷部さんと高橋さんという人が同じ所にいらっ」

聞き手（羽場）「手紙をやり取りしたことは何度もあったのですけれども、こちらの前にある、皆さんが作っていただいたマス

コット人形を贈ったということなんですけれども、そのことについても詳しく教えていただきたいです。」

語り手（前田）「たいした話はないのよね。」

聞き手（羽場）「マスコット人形を作るといのは、学校などで習ったのでしょうか。」

語り手（栢川）「いやー、習わないよね。」

語り手（前田）「習いません。」

語り手（前田）「掃除に行つて、その晩に作つて明くる日には持つて行つて上げるものでした。」⁽²⁾

聞き手（羽場）「作るのが上手な同級生などに教えてもらつて作るという感じででしょうか。」

語り手（前田）「上手も下手も何もないのよ。おかしい人形を作つてね、上げるものでしたよ。」

聞き手（坂元）「マスコット人形を、どなたに差し上げたとか、特攻隊員のお名前に記憶がありますか。」

語り手（前田）「それは覚えてません。一人だけ上げました。その方には、ここ何年か前に四国まで会いに行きました。まだ永

崎さんが元気なだったものですから、二人で会いに行つて、そこに泊つて帰りました。」⁽³⁾

聞き手（坂元）「四月十二日前後でマスコット人形を差し上げた特攻隊員の方はいませんか。」

語り手（前田）「いつだったかは知らないけど上げましたよね。晩に、帰つてから作つて。本当に幼稚な人形を作つて上げるものでしたよ。」

聞き手（坂元）「この皆さんが作つていただいたのがありますけども、

人形の形というのは、何かモデルがあるものでしょうか。」

語り手（前田）「自分で考えて作つてますね。」

聞き手（坂元）「四月十二日の写真ですと、穴澤利夫さんがこの写真には写っているとお聞きしたのですけれども、この方にもマスコット人形を差し上げたり？」

語り手（前田）「差し上げたつもりです。皆に上げましたよね。」⁽⁴⁾

聞き手（坂元）「どのタイミングで差し上げるのですか？見送りのときですか、それとも三角兵舎に居る時ですか？」

語り手（前田）「三角兵舎だつたと思います。そしたら、飛行機が飛び立つ前に、飛行機の前に下げて征かれましたよね。それだけは覚えています。」⁽⁵⁾

聞き手（坂元）「ああ、そうですか。一人の特攻隊員が幾つも人形をもらうのですかね。」

語り手（前田）「みんな人形はあまり作らなかつたです。」

聞き手（坂元）「全員が人形を差し上げているのではなくて、その中の何人かということですね。」

語り手（前田）「そうそう。何人か。桑代さん、人形を作つた？」

語り手（桑代）「私は特攻隊の方じゃなかったから、戦隊の方だったから上げる様な人は。そして作つていたけど、夜に作れないものだから、綿を足に詰めたりとかするので断念したのです。もう作らないって。でも今度はちゃんと作りました。」

聞き手（坂元）「ありがとうございます。ここの方にある物は、三角兵舎の所で発掘調査が行われているのですけれども、その土の中から発見された物です。こちらの方がご飯茶碗ですね。それからビール瓶、サイダー瓶、こちらがレ

コードの破片です。もしかしたら皆様方が七十六年前に目にしたものかもしれません。もしかしたら、どなたか特攻隊員の方が使われた物かもしれません。今、人形をここに添えておりますけれども、特攻隊員の方が使ったかもしれない、この品物の前に人形を置かしていただくことで、特攻隊員達への慰霊になったのではないかなと感慨深く思っているところです。特攻隊員のお話しばかり続きましたけれども、飛行戦隊のことについても少しお尋ねしたいと思います。飛行戦隊というのはどのような方々ですか。」

語り手（桑代）

「すごく強い男、膝まで革の靴を履いて近寄りがたかったです。洗濯でも何でもあれば差し上げてくださると、頼もうとした人もいました。中尉、少尉の上の人達だったから、護衛していく人達だったから。若くはなかったですよ。」

聞き手（坂元）

「特攻隊員の方々と戦隊の方々では雰囲気が少し違ったわけですかね。」

語り手（桑代）

「まあ、作業と見送りは一緒だったけど、兵舎が違ったから、人間も戦隊と特攻と全然違ったから。この人達は接触しているの。でも私なんか、特攻兵が坊主頭で服装も洋服を着て、飛行服は出発する時しか着ないから、だから、いずれか征く人だなあと思ってた会釈ですれ違って。」

⑤ 時には用事がある時は兵舎から出てきて、すれ違ったことがあります。もう間もなく出るのだなあと思ってた、後ろを振り向いて見たこともありますね。部屋に大概籠っていてあまり出歩きはしなかったと思うんですけど。時に兵舎から出て。」

聞き手（坂元）

「ここにある写真（※女学生が給仕をする写真を示しながら）なんですけれども。」

語り手（桑代）

「それは知っている人が、誰と誰だと。要子さん知らない？」

語り手（前田）

「私達はこの人知らない。」

語り手（桑代）

「ひらたしいうちゃんか、さこつるちゃんかと言って。」

語り手（前田）

「ひらたしいうちゃんだね。」

語り手（桑代）

「笙子さんが言ったことがあるんですけど。はっきりは私も知らない。」

語り手（前田）

「私は知らない、こんなのは。」

語り手（杉川）

「松村ちいちゃんではなかったかな。」

語り手（桑代）

「笙子さんが生きていればわかるのだけど。あの人は詳しかったから。」

聞き手（坂元）

「あの写真は飛行戦隊の方々だということを聞いたことがあるのですが。」

語り手（桑代）

「戦隊じゃないの？戦隊と聞いたこともあったけど。特攻隊ではなく戦隊だよと、前田笙子さんが言っていたこともあったけど。」

語り手（杉川）

「食事係が。」

聞き手（坂元）

「食事をしてますよね、食事をしていて、お茶を注いでる様子ですよね。」

語り手（前田）

「食事なんか見たこともないし。」

語り手（桑代）

「特攻なのか、何なのか今は知らない。ちょっと遅かったですね、永崎さんが生きていれば。詳しく知っていたでしょうに。私はそれを聞いただけ。」

聞き手（坂元）

「あと、三角兵舎での慰問。舞台があったというのを聞いたのですが、そのことを何か覚えてらっしゃいますか。」

語り手（鶴留）「それは確かに覚えています。」

語り手（前田）「私は見たことがない。」

語り手（鶴留）「三角兵舎の隣が広々としたところがあつたから、そこに舞台があつて、慰問に来たんだろうと思うけど、その舞台で踊りをしたのは確かに覚えています。」^下

聞き手（坂元）「その踊りをしているのを鶴留さんもご覧になったわけですね。」

語り手（鶴留）「その時は私達も踊りを見ていた、それはあります。その時に、兵隊さん達が来ていたかは覚えていません。見に来ていたのか。私達は踊りを見ていました。女の人だけだったと思います。歌なんかなくて、踊るのだけを記憶にあります。舞台の上でね。」

聞き手（坂元）「皆様方から、色々なお話をまだまだたくさん聞きたいところではあるのですけれども、予定していた時刻を過ぎてしまいました。まだまだこれから色々な事を教えていただきたいと思っております。最後に羽場さんまとめを。」

聞き手（羽場）「本日私としては初めての聞き取り調査で、皆様からこのような貴重なお話を聞けてとても嬉しいですし、有難いと思いました。知覧特攻平和会館は、以前よりこのような聞き取り調査を何回も度重ねておりますが、今回の聞き取り調査、座談会も含めて皆様から聞いた貴重なお話を、私も含め後世まで大事に語り継いでいきたいと思ひます。今日は貴重な時間をいただき、ありがとうございます。」

語り手（戸川）「私は、八巻さんと永崎笹子さんの一問一答を見て、本来に最初から最後までがわかつて、^下八巻さんのあれ

を見て、感謝というか、呼んでいただきまして、ありがとうございます。」

聞き手（坂元）「最後にお一言ずつ何かないですか。前田さん如何ですか。」

語り手（前田）「子どもだったから良かったんですね。これが今の年であれば、奉仕なんて出来ませんでしたよね。可哀相ですね。飛び立って行かれたら、それまででしょう。本当に本当に悲しいものでしたよ。だけどそれは子どもだったから、笑ってね、手を振って見送りしましたけどね。私はいつもこんな風に思います。子どもだったから良かったなあと。思って。本当に人間ですからね。飛び立って行かれれば、もう死ぬということは分かっているわけでしょう。だから本当に本当に悲しかったわけですけども、それだけはなかったですね。可哀相という気持ちは多分ありましたけれどね、今の様な気持ちとは、ちょっと違いましたから、見送りもできました。そう思っています。私はいつも。でもね、可哀相なことでしたよ。立派なお兄さん達が、飛行機諸共突っ込むということは、本当にね、今の時代では考えられません。」

聞き手（坂元）「どうですか、最後にお一言。」

語り手（桑代）「二度とあつてはならないこと。やつてはならないことは戦争だと思ひます。是非世界に訴えたいです。」

聞き手（坂元）「はい。皆様本当に貴重なお話を伺ひさしていただきまして、ありがとうございます。」

聞き手（羽場）「ありがとうございます。」

聞き手（坂元）「特にこの部屋の中で一番若いのが彼女です。まだ二十代ですので、これからも、色々なことを教えていただけて語り継いでいくと思いますので、またこれからも色々

五・考察

と教えてください。」

聞き手（羽場）「よろしくお願いします。」

聞き手（坂元）「以上で座談会を終了します。ありがとうございました。」

波線部（ア） 知覧高等女学校の校章は、ナデシコの花びらがモチーフ

になっている（写真10）。当時の女学生が制服に着用していたと思われるバッジが、知覧特攻平和会館に収蔵されている（戦史資料室に展示中）。

波線部（イ）「なでしこ部隊」という名称は、戦後になってからの俗

称である。「なでしこ会」の名称は、会員名簿によれば、結成は卒業から三年後の昭和二十六（一九五二）年である（写真11）（注12）。



写真10 知覧高女の校章バッジ（知覧特攻平和会館所蔵）

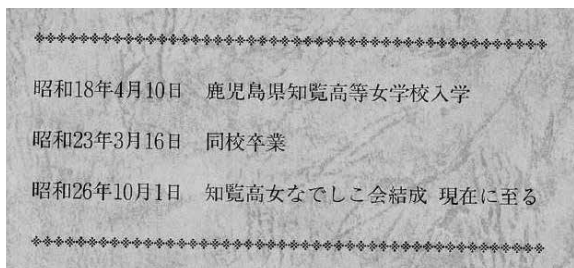


写真11 知覧高女なでしこ会会員名簿より（個人蔵）

波線部（ウ） 写真の初出は、昭和二十（一九四五）年四月十七日付け

毎日新聞記事である。彼女らが写真の存在を知ったのは、昭和四十（一九六五）年に同新聞社が発行した雑誌に掲載されて以降であったようである。

波線部（エ） 座談会では触れられていないが、なでしこ会のうち数名

は、五月三日の知覧特攻慰霊祭に毎年参加し、式典の後に三角兵舎跡地を訪れ、持ち寄った弁当を広げることを行っていた。当館の語り部、大隣健二の母親（故人）もその一人で、昭和四十年代頃に撮影された写真が残っている（写真12・15）。

波線部（オ） 永崎（旧姓：前田）笙子からの聞き取り調査によれば、

当初は知覧郡地区の市街地に住む女学生十八名が三角兵舎に派遣され（注13）、その後を増やされたようである。

波線部（カ） なでしこ会の全員が同じ体験を共有しているわけではな

く、写真が撮影された四月十二日に見送りの現場にいた者と三角兵舎内に残る者がいたことがうかがえる。

波線部（キ・ク） 前田笙子筆「特攻日記」の記述から、いったんは見

送りの場所に行ったものの、操縦席内に桜の花がいつぱいになっている機を見て、自分たちも差し上げようと三角兵舎へ取りに戻り、桜の枝を手に持ち再び見送りの場へ向かったことが読み取れる。今回の証言と合わせ、当時の状況がうかがえる（注14）。

波線部（ケ） 役場横の麓川沿いにあった花井手公園の桜で、山桜とソ

メイヨシノがあった。知覧高女三年生が三角兵舎で勤務奉仕をしたのは、昭和二十（一九四五）年三月二十七日から四月十八日までの二十三日間である。その間の時期により桜の枝の採取地は異なっていたと思われる、早い段



写真13 三角兵舎跡地での会食①（個人蔵）



写真12 慰霊祭に参列したなでしこ会（個人蔵）



写真15 三角兵舎跡地での会食③（個人蔵）



写真14 三角兵舎跡地での会食②（個人蔵）

波線部（コ）

階では花井手公園の山桜またはソメイヨシノであったようであるが、写真が撮影された四月十二日は前田笙子が持参した八重桜であったことが、これまでの調査で明らかになっている（注15）。

波線部（サ）

女学生らが桜の枝を持ち寄ったのは、出撃する特攻機の操縦席内に納めるためであった。高木俊朗著『知覧』には、「特攻機の操縦席のふちには、花輪のように、桜の花が飾ってあった。また席の中にも、らんまんと咲いた八重桜や山桜の枝がいれてあった。当時の知覧高等女学校の奉仕隊の女学生のしたことであった。」「生徒たちは、その残りの枝を持って、特攻機の離陸して行く時に、高く激しくふった。」という文がある（注16）。

波線部（シ・ス）

これまで、モンペの柄模様の記憶を根拠に永崎（旧姓前田）笙子らが推定していた人物とは異なる（注17）が、鶴留さんは写真の右端に写る人物は自分と認めている。

波線部（セ）

女学生らは、三角兵舎での滞在中に特攻隊員が家族にあてた手紙を預かって投かんすることや、ノートに書いてもらっていた。前田さん・栢川さんの証言にある手記の原本は確認できていない。

波線部（ソ）

三月下旬から四月下旬にかけて特攻戦死した隊員名では、名四月二十二日に出撃した第三十一振武隊の長谷部良平少尉と、第八十振武隊の高橋弘中尉がいる。出撃日の数日前から知覧に滞在しており、女学生との交流もあったと推測する。

女学生の中でも、特攻隊員と接する方々はマスコット人形を手渡すことが実際に行われていたようで、戦後五十年を記念して収集された手記にも、「私たちは隊員たち

が飛行服の下に首に巻いている真っ白い羽二重のマフラーやくつ下など洗濯する日課の中で、田んぼでレンゲ草の花を摘み花飾りや花束をつくってあげて、出撃前の隊員たちをささやかに慰めたものです。また、家に帰っては布切れを集めてマスコット人形を作ってあげると枕元に追っているかべにかけたり、ポケットに入れてよろこんでいました。^(注18)という記述がある。

波線部(タ) 戦後、元特攻隊員との交流があった。

波線部(チ・ツ) 穴澤利夫大尉へマスコット人形を手渡ししたエピソードは、これまで記録されていなかった事実である。

波線部(テ) 飛行戦隊担当であった女学生は、特攻隊員との直接の交流は少なかったようである。

波線部(ト) 三角兵舎群への営門の脇には広場があり、そこに設置された舞台で慰問が行われたようである。

波線部(ナ) 「知覧特攻平和会館紀要」第一号に掲載した、八巻聡「女学生が綴った「特攻日記」の基礎的研究」の中の永崎(旧姓前田)笙子への聞き取り調査のことを指している。

おわりに

限られた時間ではあったが、特攻隊員と接した方々の語る言葉を座談会という形で言い報告することができた。語られた内容は、既知のエピソードに対する個人的な記憶をたどるものが主であったが、一部にはこれまで本人が公の場では語ってこなかった事柄も含まれていた。これらは、戦後七十六年が経過する中で再構築された記憶であることは留意しておく必要があるものの、実際に特攻隊員を見送った方々の語った言葉として後世に伝えていきたい。



写真16 知覧高等女学校跡の記念碑



写真17 記念碑裏側

知覧高女なでしこ会は、平成二十一年五月三日、女学校跡地(現在の知覧小学校敷地北側にある旧知覧給食センター附近)に記念碑を建立している(写真16～17)。それから十三年が経過した今、存命の方々も九十歳を超えた。本稿が、特攻の記憶を携えて生きてきた知覧高女なしこ会の活動の総括的な務めを果たすことができたならば幸いである。

今後の研究課題として、女学生が特攻隊員から預かった手紙をその家族へ郵送する際の添え書きの集成や、知覧高女に関連する実物資料の掘り起こしを行っていくことなどが考えられる。

最後に、当時の学校建物の写真(写真18)と、彼女らの女学生時代の写真(写真19～23)を添えて稿を閉じたい。

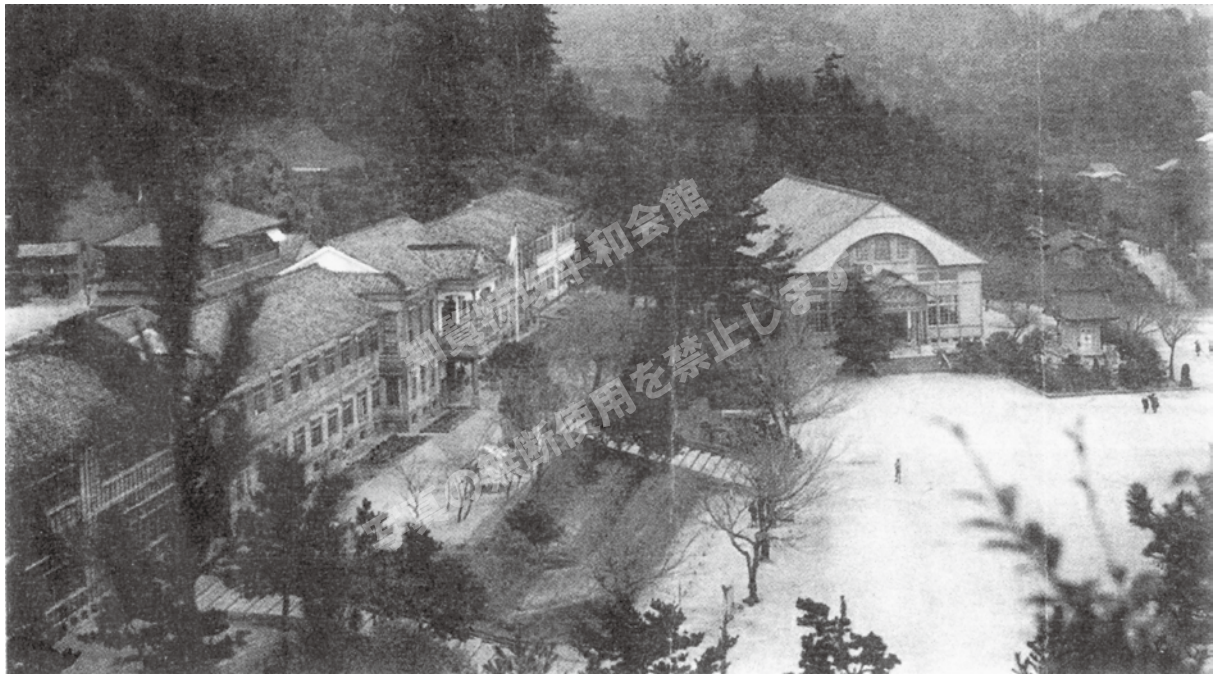


写真18 知覧高等女学校及び知覧尋常小学校建物の写真（知覧高女なでしこ会会員名簿より転載）
写真説明：写真左中央の建物は知覧尋常小学校校舎。その後ろに知覧高等女学校校舎があった。
写真右中央は講堂で、右側に奉安殿があったことがわかる。



写真19 知覧高女の写真1（知覧特攻平和会館蔵）
卒業年である昭和23年頃に撮影されたと推定される（写真19～23）。



写真20
知覧高女の写真2
(知覧特攻平和会館蔵)



写真21
知覧高女の写真3
(知覧特攻平和会館蔵)



写真22
知覧高女の写真4
(知覧特攻平和会館蔵)



写真23 知覧高女の写真5（知覧特攻平和会館蔵）

【注】

- 注1 坂元恒太「特攻を見送る写真に関する考察」『知覧特攻平和会館紀要』第三号一～三四頁、二〇二一年
 - 注2 知覧高女なでしこ会「会員名簿」、一九九八年（個人蔵）
 - 注3 高木俊朗「知覧」朝日新聞社、一九六五年
 - 注4 神坂次郎『今日われ生きてあり』新潮社、一九八五年
 - 注5 前掲注1文献
 - 注6 知覧高女なでしこ会編『知覧特攻基地』高城書房、一九七九年
 - 注7 村永薫編『知覧特別攻撃隊』ジャブラン、一九八九年
 - 注8 八巻聡「女学生が綴った『特攻日記』の基礎的研究」『知覧特攻平和会館紀要』第一号、知覧特攻平和会館、八〇（三三）～三九（七四）頁、二〇一九年
 - 注9 佐藤早苗「特攻の町・知覧」潮書房光人社、二〇〇七年／赤羽礼子・石井宏『ホテル帰る』草思社二〇〇一年
 - 注10 戦後五十年記念誌刊行会編『特攻のまち・知覧』戦後五十年記念誌刊行会、一九九五年
 - 注11 前掲1文献、一五頁
 - 注12 知覧高女なでしこ会「会員名簿」一九九八年
 - 注13 八巻聡「女学生が綴った『特攻日記』の基礎的研究」『知覧特攻平和会館紀要』第一号、知覧特攻平和会館、二〇一九年、六一（五二）頁
 - 注14 前掲1文献一四頁
 - 注15 前掲1文献一八頁、表2・表3に桜の推定採取地を整理した。
 - 注16 前掲3文献八頁
 - 注17 前掲1文献四頁
 - 注18 戦後五十年記念誌刊行会編・発行『特攻のまち・知覧』、一九九五年、当時知覧高等女学校三年生塗木とし子の手記、二二六頁
- （さかもと・こうた 知覧特攻平和会館管理係主任主査（学芸員））
- （くわしろ・てるあき 知覧特攻平和会館管理組合語り部）

<要約>

本稿は、令和3（2021）年4月12日に行った、知覧高女なでしこ会の座談会の報告である。知覧高女なでしこ会とは、昭和20（1945）年当時に知覧高等女学校3年生で知覧飛行場で特攻隊員の身の周りの世話をした経験を持つ女性らのことである。座談会には、知覧在住の健在な4名の方が参加した。そこでは、既知のエピソードに個人的な記憶をトレースしたものが主ではあったが、それまで公の場で語られなかった事柄も語られた。語られた内容は、戦後76年が経過する中で、再構築された記憶であることは留意しておく必要はあるが、当時者によって語られた言葉として記録し、後世に伝えていきたい。

この座談会の報告が、特攻の記憶を携えてきた知覧高女なでしこ会の活動の総括的な務めを果たすことができれば幸いである。

<Summary>

Report on the Chiran Girls' High School Roundtable Discussion

This paper is a report of a roundtable discussion held by the Chiran Girls' High School group "Nadeshiko-Kai" on April 12, 2021.

The Chiran Girls' High School "Nadeshiko Kai" is a group of women who were third-grade students at the Chiran Girls' High School in 1945, and who all experienced looking after the kamikaze pilots at the Chiran Airfield. Four Chiran residents in good health participated in the roundtable discussion. During the course of the discussions, the participants traced their personal memories back to known episodes, as well as recounting experiences that had never been discussed before in public.

It should be noted that the content of what was said are from memories that span the 76-year period of time that has passed since the end of the war, nonetheless, the words spoken by those who lived during that time should be passed on to future generations.

I hope that the report of this discussion will serve as a summary of the activities of the Chiran Girls' High School Nadeshiko-Kai, which continues to carry the memory of the kamikaze pilots.